

総評 2023年7月分 杉本真維子

「ベランダの／四角さばかり気に掛かる／／暑い」立花ばとん（東京都）
抑制された詩の額縁に「暑さ」がストイックに描かれています。

「半分もミスしてもうた模試やけど／振り返ったら満天の星」小林紅石（埼玉県）
平凡さのなかに見出される美しさが、方言によってより際立つものとなっています。

「ざらざらの網戸の向こう側にだけ／咲いてる花のほんとの色は」うたた（岡山県）
「さらさら」の網戸の感触がとても効果的です。真実への希求やそれゆえの格闘を真摯に伝えています。

「どうかこの針の月を／貴方は見ていませんように」山本欠伸（兵庫県）
針の月を見たときのどこか落ち着かない気持ちの理由はこれだったのかもしれませんが。

「十八のおれだけがいた教室は／でかいものが／死んでいくための広さ」森榮太（東京都）
十八といううつわが備えている大きな未来と、その大きさの分だけ満たされない思いが巧みに表現されています。

「太陽も地面も／私を焼いて／食べたいのかしら」あいな（東京都）
猛暑をこのように捉えるとは新鮮です。たしかに大きな存在の目から見たら、猛暑にもだえる「私」たちはフライパンの上で調理されている食材のようかもしれません。ちょっとこわいことですがこの世の真実を突いていると思います。

「夕暮れに／あなたと別れひとり／わめく蝉」あいな（東京都）
こちらの作品も「わめく蝉」という言葉の接続に一瞬どきりとさせられます。真実のかけらをつかんでいるからだと思います。

「ソフトクリーム巻き方を／君が／教えてくれたときの／からだを／おぼえてる」真島しましま（千葉県）
身体的記憶は貴重なものですね。そこから何度でも出発して書くことができます。

「下駄の緒の馴染まぬうちに／遠くから響く花火を／くらやみで聞く」うろ仔（北海道）
卓抜した深さがあります。このように簡単には解釈に取り込まれない言葉の力を大事にしてほしいと思います。

「雨の日の蜘蛛の巣だけが覚えてる／星座早見に残らない星」永山逢海（神奈川県）
濡れた蜘蛛の巣のかがやきが、見えない星の光をあばくかのようです。

「大切にされていないと／気付いたときの／夏燕 雲の峰を越えて」桜望子（山形県）
大空の鳥の小さな旋回と心の小さな曲線が一致します。その美しさに注目しました。

「落っこちてる雷を拾った／交番に届けるのは明日でいいか」山神慶具（神奈川県）
雷がとたんに愛らしいものに思えてきます。誰もが一度は拾ったことがあるのかもかもしれません。

「夜学から帰れば母はおかえりと／ゾンビのように毛布をはらう」松下誠一（東京都）
どんなに遅くなっても自分のために起きてきてくれる「母」。深い愛が軽快に書かれています。

今回は十代の新たな投稿者が目立って活躍されたように思います。次回も楽しみにお待ちしています。